

招かれた客の醍醐味

上内鏡子

奨励者紹介 [かみうち・きょうこ]

日本キリスト教団神戸イエス団教会牧師

食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。そこで、イエスは言われた。「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させていただきます』と言った。ほかの人、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させていただきます』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席があります』と言うと、主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。』」

(ルカによる福音書 14章15—24節)

導入

新しい年度が始まりおよそ一月が経とうとしています。

学校生活から遠のいている私は、この4月という月が学校へ通う学生たちにとって、激変の月であることを全く忘れていました。

新年度の始めは、学校が変わったり、学年が変わったり、クラスが変わったりして、環境の変化が顕著である月です。学ぶ内容が全く違います。また、学校の先生たちとの関係も変わります。何よりも、自分の友人関係が変わってしまうということが、最も重大な変化なのではないでしょうか。

ある新聞に、新学期のクラスについて生徒たちの心情を綴った興味深い記事が掲載されていました。新学期の新しいクラスでは、自分の属するグループを選ぶのが、生徒たちにとっては死活問題であるということでした。楽しくうまく学校生活を送るために、自分のレベルを懸命に見極め、クラスの中でふさわしいグループを早く見つけるのだそうです。それが死活問題にかかわるということの理由には、あぶれた人たちは、残り組で最下層と見られてしまうという危うさを含んでいるかららしいのです。

これが、現代のスマホ時代では拍車をかけて、学校のクラス内だけでは収まらず、自宅に帰宅後も、ラインなどでグループ選びの消耗戦が続くのだそうです。

学校制度の見直しや教育現場での改善などが求められている時代である一方で、学校内ではとうて

い追いつけない現代の課題が多くあり、子どもたちが素直で健全に成長するには、あまりにも複雑な世の中であり、教育現場の厳しさを実感させられました。

学校で良い友だちと出会い、互いに刺激し合いながら、良い学校生活を送るということは、現代の子どもたちは経験できない過去のことなのかもしれません。

あるいは、昔からあったことを私が知らなかっただけなのかもしれません。

子どもに負わせる大人の世界

一番多感で、一番物事を吸収し、成長する伸びしろが多い子どもの時期に、自分の「レベル」を見極めながら、友だちグループに参加して、他の人たちに合わせながら学校生活を送るということが、果たして、子どもの成長にとって「ふさわしい」のかと考えさせられます。また、社会の平等や平和、人権の尊重などを教えるはずの教育場で、暗黙のうちにはいえ、子どもに「グループ」を選ばせたりする圧力がかけたり、グループ間に上下の関係ができるなど、深刻な状況が生まれています。教師たちの教育内容と実際に学校の現場で起きている現実とのギャップを生み出すねじれた学校生活の中で、子どもたちは、大人をどのように受け止めていけばよいのでしょうか。

新聞記事に掲載されていた子どもの例は小学校6年生でしたので、そんな時期から社会人並みの気遣いをさせられながら生きているのだと驚愕しました。まるで今の日本社会の縮図のようです。

神の国のたとえ、大きなつまずき

このような時代の現実に対して、本日の「神の国」のたとえ話は、異議を申し立てているのではないかと思います。

この聖書箇所は、ここ数年の私の生活で、一番のヒット箇所でした。なぜなら、この聖書箇所に合点がいった時、生きづらい世の中の扉が開けられ、神の穏やかな風がすーっと駆け抜けたような爽快感を覚えたからです。

この年になるまで、実はさっぱりこの聖書箇所が理解できませんでした。

このイエスのたとえが、なぜ「大宴会」であって、なぜ「神の国」にたとえられるのか、不思議でたまりませんでした。それが、やっと合点がいったのです。

聖書箇所の中で、大きなつまずきはいくつかありますが、顕著なものは、次のようなものです。

人々は随分前から大宴会に招かれていたにもかかわらず、「ドタキャンする」というとても非常識な対応をしたことです。また、断られた大宴会の主催者である主人は、どうして無理矢理に席を一杯にしななければならなかったのかという疑問が残ります。主人のプライドが許さず、エゴで、傲慢で、自己満足のようには映りません。また、席を埋めつくすためにわざわざ連れて来られた人たちは、貧しかったり、社会の片隅にいたりするような人たちでした。腹立たしく思えます。有無を言わず大宴会を催すほどの力をもつ者による暴力ととれないこともない行動だからです。招かれる人は、「来るか来ないか」という意向も聞かれませんが、威圧的で、「道ばたに寝ている人なら暇だろう」なんて考えていると想像できるような招き方に憤慨します。

そもそも、イエスがこのたとえを語ったことの信憑性はあるのか。疑うような物語です。

大宴会に招かれた人々は、招待状を受けた人ではなくて、広場や路地から勝手に連れて来られた人たちや、大通りから無理矢理連れて来られた人たちでした。そして、互いに何の関係もない人が一緒に食卓につかなければならなかったということです。それが、神の食卓を味わうものとなるということです。それが一体神の国なのか、理解を超えています。

先に紹介した子どもたちのグループ選びの現実とはほど遠いものです。イエスの語る大宴会は、新クラスの子どもたちにとってみれば、地獄のようなものでしょう。それは、私の個人的な見解とも全く違うものです。

現代の社会に向けられた挑戦状

私の考える神の国、理解していたイエスの食卓と全く違います。イエスの考える食卓は、強制して連れて来られた者らがつく食卓ではないはずだと思いたいのです。大宴会のたとえは、神の国の何を示しているのでしょうか。

神さまが聖書をとおして知らせようとしていることは、簡単に言ってしまうと、この世で「愛すること」や「人を大切にすること」「みんな平和でなかよく」することなどではないでしょうか。しかし同時に、その単純に思える愛や平和の実現はなかなか難しいものなのです。

事実、アメリカ合衆国然り、北朝鮮然り、イギリス然り。現代の世界の状況は、各国ともに保守主義を決め込み、ある一定の民族や国民に焦点を当てた利益をもたらすような主張をして、互いの国が一触即発と言ってもよい状況を作り出しているのです。これでは、キリストの愛と平和は近いとは言い難いのです。

今も昔も、社会の状況は本質的には同じ問題を抱えていたのではないのでしょうか。だから、イエスが一見乱暴にも見えるたとえを用いて神の国を話されたのは、どの時代においても、人間が自分の都合で選んだ人たちだけでは、神の国は実現しないのだということが言いたかったのではないのでしょうか。

この世の愛や平和は、自分の都合を越えたところにこそ真実があることを教えているはずです。だからこそ、キリストは十字架の死を乗り越えたのです。いや、その死を乗り越えざるを得なかったのです。

神の国の中で起こる人々とのかかわりは、「私」が選ぶ関係ではなく、そこで出会っていく関係です。「自分のレベルを見極めて、自分の位置を常に測って、自分にふさわしいグループを探す」関係作りではありません。

独りよがりを作り上げる関係とは一体なんなのでしょうか。それは、結局は自分中心の、自己保身の中で、人との関係を「消耗」していく仕組みでしかあり得ません。

本来ならば、子どもたちが新年度を迎え、新しい環境に入り、新しい先生やクラスメートと出会い、新しい学びを始めるワクワクと高揚する気持ちをもつことが、「新学期」として期待されているのではないのでしょうか。

担任の先生や友人は、見極め選んでいくのではなくて、出会っていくものです。グループやクラスは、初めから出来上がっているものではなくて、少しずつ形成されていくものです。小学生の頃から自分の分をわきまえて、その範囲内で当たり障りなく行動し、勉学を進めていくような学校生活は、自己中心的な考え、嗜好や傾向が自らの基準となってしまう、自己至上主義に陥らないとも限りません。

一方で、聖書の大宴会では、神の御心が働く関係です。

課題は、この無関係な人々が一つのコミュニティに成長するには、どうするか。それが、この聖書にヒントがあります。

神が選んだ人々と私はどう向き合っていくか。神が私たちをその人たちに会わせ、向き合せているのです。要するに、大宴会への招待状ではなく、むしろ、この世でどう生きるかの挑戦状を突きつけられているのだと思います。

天国屋のイエスの食卓

私は現在、天国屋カフェというコミュニティ・カフェにかかわっています。その目的は、「生きづらさ」を抱えた若者がカフェを居場所にしてくれるということでした。気持ちの上では、「イエスの食卓」を実現しようとしていたのかもしれませんが。

ところが、思うような理想の人たちは来なかったのです。来たのは、ご近所のうるさいくらいによくしゃべるおばあさんたちや、周りを引っ掻き回すようなグループ行動に馴染めない人たちでした。本当に最初は、がっかりしました。焦りました。こんなはずじゃない。もっと、学生たちがいっぱい来て、和気あいあいとカフェを運営している姿が私たちのカフェの姿のはずでした。

しかし、この聖句を読んでいたら、私が招きたかった人をテーブルにつかせて、イエスの食卓を完成させようとしていたことが神の国を大きく外れていたことに気づきました。これは大きな反省がありました。

天国屋の食卓につくために、神に選ばれた人たち（つまり、毎日来るカフェのお客）と私がどう向き合うかが、神さまからの挑戦状として与えられていて、その想定外の人々と向き合う中で、イエスの食卓が育てられていくということに気づきました。主導は、「私」ではなく、私を越えた大きな力をもつ方にあるのです。

想定外の人々は、まさに、前もって招かれていた人々ではなく、無理矢理にテーブルにつかされた人々だったのです。そこには、神の力が働いていました。

この人々と向き合うことが新しい発見へつながり、関係を深め広げ、すべての違いや壁を越えて、人の出会いが愛や希望を生み出していくことになります。

招かれた者たちの醍醐味は、得体の知れない者同士だと思っていた一人ひとりが、少しずつ近しくなり、新しい共同体を作り上げる可能性をもつということです。

今のこの時代にこそ、ふさわしい聖書であり、現代の私たちに向けて、大いに警鐘を鳴らす聖書の箇所があります。

2017年4月26日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録